

本書は、主としてラマ5世の時代までを取扱い、上のような時代区分に従って、それぞれの時代の租税の形態、税収額、税務行政の仕組み、租税政策などを取上げて記述しているのである。(清永敬次)

*The Dynastic Chronicles, Bangkok Era, the Fourth Reign, B. E. 2394~2411 (A. D. 1851~1868). Translated by Chadin (Kanjavananit) Flood. Volume One: Text. Tokyo: The Centre for East Asian Cultural Studies, 1965. xvi+267p.*

まことに不思議なことなのだが、タイ国史研究の現状を見ると、史料のきわめて限られているスコータイ史や、アユタヤ史の研究より、かえって史料の豊富なラタナコーシン史、とくに1932年の立憲革命以前の歴史研究の方が手薄である。この点 W. Vella の「ラーマ3世史」などは、この方面でのパイオニアワークとして大いに高く評価されるべきであろう。

さてラタナコーシン史研究者がまずよるべき「正史」といえば、Chaophraya Thiphakorawong の *Phra-ratcha Phongsawadan Krung Ratanakosin* を挙げるべきであろう(この年代記については『東南アジア研究』第2巻第2号所収拙稿参照)。上記の Vella もこれを縦横に引用している。本書はこれまで意外な程利用されることのすくなかったこの貴重な年代記の内、「ラーマ4世」の部の前半の完訳である。何はともあれ、本邦はおろか世界初訳という業績が、わが国の研究機関の手で生み出されたことを喜ぶたい。と同時にこの困難な企画をとりあげ、これを完成へと導いた東アジア文化センター関係者の識見と努力とに対し、心からなる敬意を表するものである。

本訳書は、「ラーマ4世年代記」のうち仏歴2404年(1861)、Yinyaowalak 内親王の前髪を断つ儀式の記事までを含み、原著の約半分(245ページまで)に相当する。固有名詞のローマ字表記は Mary Haas 式の音素記号をもって行なわれ、声調まで厳密に表記し分けている。

この種の文献の翻訳につきまとう困難のひとつは、政府機関ないし役職名に対する訳語選択の問題である。本訳者は原語直訳主義をとり、どうしても適当な訳語の見出せないときは、原語をそのまま残すという

慎重な態度をとっている。タイ語の昔の官庁名または役職名には名称と機能の一致しないものがまま見受けられるので、この訳本のみをたよりとする一般読者にとって、直訳主義はあるいは misleading となるおそれなしとしないが、この点は、続刊予定の第3巻:註解の中で解決されるものと信ずる。

訳者はタイ人で、チュラロンコン大学文学部を首席で卒業後、ワシントン大学に学び、東南アジア史を専攻して修士号を獲た新進の歴史学徒であるが、本訳書の完成には、タイ語と共に、日本語、中国語をよくする歴史学者の夫君(米人)の協力があずかって力あったと聞いている。全3巻の完成を心より期待したい。

(石井米雄)

Thawi Mukthorakosa. *Phramaha Thiraratchachao*. Bangkok: Phrae Phitthaya, 1963. ix+844p.

タイ国近代史のなかにプラモンクットクラウ王、すなわちラーマ6世をどう位置づけるかは、政治史学者にとって焦眉の課題となっている。たとえば1932年の立憲革命の素因のおおかたは、ラーマ6世の統治のなかに求められねばならない。とにかく、毀誉褒貶の激しい人物で、従来、この国王の評価は、タイ国内外で、はっきり2つにわかれている。

そのわりに、ラーマ6世の統治についての実証的研究は、殆んどなされず、その御代に生じた事柄を明確にしかもまんべんなく捉えることは、これまでかなり困難であった。国王の特に後半世における「乱行」が世に知られることを怖れてか、ラーマ6世についての一次資料の一部は公開されないともいわれている。それに、国王の統治した時代がまだあまりに近すぎるこある。それらの理由から、ラーマ6世の研究は、ある種の困難さに伴われているのだ。

本書は、そのラーマ6世に真っ向から取り組んだすぐれた伝記である。ラーマ6世に関する基礎文献をひととおりおさえ、それをさらに、同時代に生きた人々の面接で補っている点、きわめて実証的である。その点で、本書は、あまたのメリットをもっている。なによりも感心することは、ラーマ6世の一生が、きわめて淡々と、しかも広く詳しくカバーされている点である。著者が、そもそものアプローチにおいて、ラー